

# 平成22年度 【 学園研究費助成金<B> 】 研究成果報告書

学部名 生活科学部

刀がナ ハシモト マサヨシ  
氏名 橋本 雅好

研究期間 平成22年度

研究課題名 住空間の壁面と開口部の関係が与える心理的影響に関する研究

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	橋本雅好	生活科学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等

近年、都市部の過密集住に対する空間の質の改善、SOHO といった居住以外の要素の住宅への取り込みなどから、従来の nLDK 型を基調とした平面計画とは異なる住空間が計画されてきている。その中で、白/黒の住宅・ヒムロハウス（設計：小嶋一浩/C+A）や T house（設計：藤本壮介）などのように、壁面と開口部の関係を考慮した住空間が計画され始めており、今後とも発展していくと考えられる。このことから、本研究では、実際の住空間で展開されている住空間形態を参照し、様々な壁面と開口部の関係を実験変数とし、住空間の仕切り方が空間認知に与える影響を、実物大の実験空間を用いて検証する。

## 2. 研究方法等

- 1) 住空間の文献および実地による事例調査：住宅の様々な壁面と開口部の事例を収集する。
- 2) 実験空間製作：事例の分析結果から、実験変数となる壁面と開口部の形態・大きさ・配置方法を決定し、実際に体験できる空間を白色段ボールおよび発泡スチロールで製作する。
- 3) 実物大実験空間による実験：実験空間（大学内に設置予定）を実際に体験し、空間の印象評価実験、領域分節評価実験、居場所選択実験、インタビューによる評価実験をおこなう

### 3. 研究成果の概要

空間の印象評価実験、領域分節評価実験、居場所選択実験、インタビューによる評価実験の結果・分析から、本研究で明らかとなった空間の連続性の違いが与える心理的影響を以下に示す。

- ①.印象評価は、空間の可視率の違いや空間の接続率、実験者の可視範囲によって、評価の傾向が変化する。
- ②.空間の領域分節は、想定した境界で得られるとは限らず、空間の可視率の違いや空間の接続率、実験者の可視範囲により壁や壁面の角を基準とした多様な捉え方がなされる。
- ③.居場所選択行動は、特に平面形状の凹凸によって生じる実験者からの死角を選択する傾向にあり、空間の可視率の違いや空間の接続率、実験者の可視範囲により選択肢が増える。
- ④.平面形状によって、印象評価、領域分節、居場所選択行動の傾向が異なり、多様な実空間の想定がなされる。

印象評価、領域分節、居場所選択行動の関係から、空間に分節感が得られる場合、実験者とは異なる領域内で実験者の死角を居場所とする傾向にあるといえ、空間を一体的だと捉える場合も主に実験者の死角を居場所としやすいが、実験者の可視範囲が広いほど空間を一体的と捉えやすいことから、自ずと狭い範囲を居場所とすることになることで、“プラス”の印象が得られにくいと考えられる。

以上のように、空間を計画する上で手かかりとなるデータが得られたことは、本研究の意義が十分にあったと考えられる。 今後はさらに、実空間に必要とされる細部の寸法の検証や、実験の設定、被験者の属性などを考慮した実験が必要であると考ええる。

### 4. キーワード

① 空間の連続性	② 印象評価	③ 領域分節	④ 居場所選択
⑤ 可視率	⑥ 接続率	⑦	⑧

**5. 研究成果及び今後の展望**（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

日本建築学会大会（2011年8月）において口頭発表予定。  
日本建築学会計画系論文（審査付）へ投稿予定。